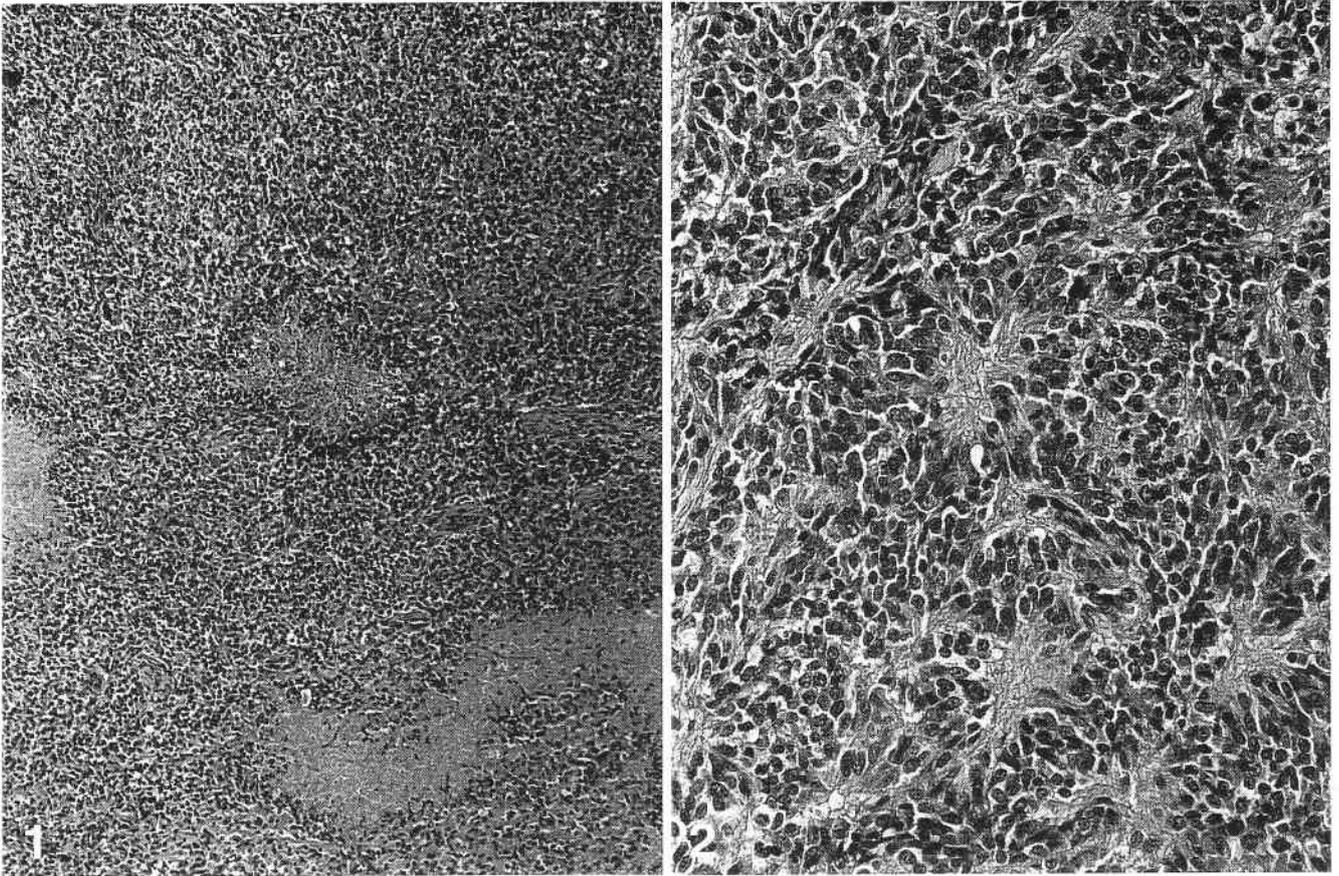


犬の脳～頭蓋部腫瘍

東京大学獣医病理学教室出題 第40回獣医病理学研修会標本 No. 784



動物：犬，ゴールデンレトリバー，メス，2歳6カ月齢。
 臨床事項：98年12月初旬から元気消失。1月3日より旋回運動を呈し，歩行困難。1月7日開業獣医に来院。異常行動，発作がみられたが，ステロイドの投与により，左旋回しながらも歩行できるようになった。その後，右眼の視覚消失。1月18日精査を行うため東京大学ベテリナリーメディカルセンター来院。MRI検査で左大脳表層から左側側頭筋にかけて連続する腫瘍が認められた。境界部の頭蓋骨は破壊されていた。1月19日畜主の希望により安楽殺し，直ちに剖検した。

肉眼所見：左側大脳側頭葉から側頭筋にかけて直径約4cmの連続する腫瘍を認めた。同部の側頭骨は融解・破壊されていた。腫瘍は表面・剖面ともに灰白色で，中心部に壊死巣および石灰沈着巣が認められた。周囲の大脳組織との境界は不明瞭であった。
 組織所見：病変部では楕円形～類円形の核を有する小型～中型細胞が瀰漫性に増殖していた(写真1)。増殖細胞の異型度は高く，分裂像も多数認められた。

これらの細胞は周囲組織にも激しく浸潤していた。また，本病巣には pseudopalisading pattern および Homer-Wright 型のロゼットが認められた(写真2)。keratin, vimentin, GFAP, NSE, S-100, synaptophysin, chromogranin A, neurofilament (NF), NF-68, NF-160, NF-200 に関して免疫組織化学的に検索した結果，vimentin のみが陽性で，その他はすべて陰性であった。

診断名：原始神経外胚葉性腫瘍 (primitive neuroectodermal tumor/PNET)

考察：本症例は pseudopalisading pattern および Homer-Wright 型のロゼット形成という組織学的特徴から PNET であると考えられたが，免疫組織化学の結果はそれを支持しなかった。また，本腫瘍は頭蓋内から側頭筋にかけて存在しており，その由来が脳であるのかあるいは頭蓋骨またはその近傍の間質組織にあるのかについてさらなる検討が必要であると思われた。